



営農NEWS



ナシやブドウの秋季防除を必ず徹底しましょう

ナシやブドウの栽培では、果実の収穫が終わった後でも、落葉するまでは、光合成産物が樹体に貯蔵養分として蓄えられる大切な時期です。このため、病害虫の発生によって早期に落葉しますと、翌年の生育に影響しますし、また、その被害部位や落葉が翌年の重要な伝染源となりますので、収穫後も適切な防除を実施することが必要です。次年度の病原菌密度を低下させるためにも、収穫後の耕種的や薬剤防除を徹底しましょう。

特に、ナシ栽培で最も問題となる黒星病は、秋になると葉裏に薄墨色のうっすらとした秋型病斑を形成し、落葉したものが翌年の伝染源となります。また、もう一つの伝染源となる芽のりん片への感染も、10～11月頃の降雨により高まる時期となるため、この時期に十分な防除を行っておく必要があります。

本年は、4月下旬から黒星病の発生が認められ、5月以降は平年並の発生で推移しました。しかし、7～8月は降水量が平年より多く、発生を助長する気象条件で推移しています。

病害虫発生予報10月号（県病害虫防除所）によると、9月下旬現在におけるナシ黒星病の葉での発生は平年よりやや多い状況です。また、ブドウべと病の発生は平年並の状況で、いずれも落葉前の秋季防除を徹底し、さらに、落葉を適切に処理するよう呼びかけています。

なお、秋季防除の散布薬剤として、県の病害虫参考防除例によりますと、ナシではオキシラン水和剤（600倍液）、ブドウではICボルドー48Q（50倍液）またはムッシュボルドーDF（500倍液、薬害軽減のためクレフノンを加用）が殺菌剤として採用されています。

＜防除のポイント＞

- 1) 薬剤散布にあたっては、十分な薬量を丁寧に散布します。なお、ナシでは徒長枝にも十分散布してください。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行うことが重要です。SS散布では散布圧を調整して、かけむらの無いように、園内を縦横に走行するよう努めてください。
- 2) 秋季防除は、15～30日間隔に2～3回実施してください。なお、秋の長雨が続けている場合は、11月の落葉前まで実施してください。
- 3) 落葉は集めて園外に持ち出し、土中深く埋めるのが最も望ましいですが、ロータリー耕などで土中にすき込むことでも一定の効果が得られますので、適切に処分します。さらに、園内の季節風の風下で落葉が集まる場所に、深さ30～40cmで適当な幅の溝を掘っておくと、そこに集まった落葉を翌春の3月までに埋め戻しておきます。
- 4) 罹病果や枝梢、巻きつる等は、集めて適切に処分するか、土中深く埋めておきます。

表1 ナシ収穫後における秋季防除の主な薬剤

（令和3年10月11日現在）

薬剤名	希釈倍率	使用時期 / 使用回数	対象病害虫	分類
オキシラン水和剤	500～600倍	収穫3日前まで / 9回以内	黒星病、輪紋病など	F:M1とM4
デランフロアブル	1,000倍	収穫60日前まで / 4回以内	黒星病、輪紋病など	F:M9
トレノックスフロアブル	500倍	収穫30日前まで / 5回以内 (休眠期は1回以内)	黒星病など	F:M3
チオノックフロアブル				
スミチオン水和剤40	800～1,000倍	(無袋栽培) 収穫21日前まで / 6回以内	ナシチビガなど	I:1B

注) 表1および2とも、分類欄にはFRACまたはIRACコードを記載しました（コードが2つは混合剤）。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。

表2 露地巨峰収穫後における秋季防除の主な薬剤

（令和3年10月11日現在）

薬剤名	希釈倍率	使用時期 / 使用回数	対象病害虫	分類
ICボルドー48Q	25～50倍	— / —	べと病	F:M1
ムッシュボルドーDF	500倍	— / —	べと病、さび病	F:M1
スミチオン水和剤40	800～1,000倍	収穫21日前まで / 2回以内	ブドウトラカミキリなど	I:1B

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



農機営農支援部 営農支援課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040